

入院

## 第15日め 狼が出る

CATS

9

**前**回の入院で同室の杉山さんと言うぼくと同年輩のホテルマンが末期ガンで6ヶ月の命を告知されていた。かれと親しくなってから、彼が好んでデイルームで食事をし、できるだけ多くの人と会話を交わしたいというので、ぼくも食事はデイルームで決めていた。でも点滴を受けながら、ご馳走を片手でデイルームまで運ぶのは苦難の業だ。そういうときは、ナースや看護師が頼むと快く運んでくれるのだが、かれらが忙しい時には、黙っていると病室まで出前してくれるので、それに甘えていた。でも、昨日いったんデイルームの開放感を味わったからには、意地でもデイルームで食事をしたいぼくであった。幸いあるナースが食事をデイルームまで運んでくれた。しかし、デイルームはここ一年の間、様子が変わってぼくがお茶のときでも一人のことが多い。患者の個人主義が強まったのか、デイルームの片隅にある喫煙コーナーでのべつ幕なしに、他の病棟からもスモーカーもやってきて煙草を吸うので、みんな敬遠しているのか。デイルームの環境悪化は否めない。こういうことは婦長（主任）も医師（院長）も指導できないのか、不思議な気がする。彼らは張り紙を刷れば責任が果たせるとでも思っているのだろうか。

**ぼ**くが、こうしてたった一人で夕食を食べていた。

廊下を通りかかった新人の大家（ぼくが嫌われている）ナースがぼくのテーブルに近づいてきた。よほど博愛主義者なのだろう。

「島岡さん。わたし今夜2度目の夜勤なの」

「大家さんは4月からきたんだろう？まだ二ヶ月も経っていないのに・・・夜勤って責任が重くて、経験が必要なんだよ。もう二度も夜勤をやるの？大家さんはきっと実力が認めてもらえているんだよ」

「そんなことはないけど。でも私新米なんだからね。島岡さんお願いだから今夜キューヘンしないでね！」

ぼくは一瞬「キューヘン」という医学用語の日本語に戸惑った。ああそうか、病気で「急変」しなければいいんだ、と思った。「今夜はいい月が出てるね」とデイルームの窓の外をながめながら、ぼくはロマンチックに大家ナースに語りかけた。「満月かしら？」とうっとり彼女は答えた。

「満月の夜は、ぼく急変して**狼**になっちゃおうかな？」

そのときぼくの口は心なしか耳まで裂けた。

「ナースって夜勤のとき仮眠を取るんだろう？それはどこなの？」

「あのね。おじさん！！！！本当に嫌い！！」

**また嫌われた。**